

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリアあれこれ②

「いたばし国際絵本翻訳大賞」に応募して

杉 栄子

このたび、第 28 回「いたばし国際絵本翻訳大賞」において特別賞を頂いた。自分の翻訳文に全く自信がなかったのに、受賞の一報には非常に驚いた。そしてもちろん嬉しかった。今回のコレンテでは、この翻訳大賞について、またそれにどのような取り組みだかについて書こうと思う。

「いたばし国際絵本翻訳大賞」とは、東京都板橋区で「外国の文化に触れ国際理解を育む」ことを目的に、1994 年から開催されている外国語絵本の翻訳コンテストである。英語部門とイタリア語部門があり、各部門において、最優秀賞 1 名、優秀賞 1 名、特別賞若干名が選ばれる。最優秀賞に選ばれた翻訳はその後出版されるので、翻訳家を目指す人にとって登竜門のような存在になっている。

ホームページを見たところ、1981 年に板橋区立美術館で「ポローニャ国際絵本原画展」を開催したことがきっかけとなり、1993 年から「ポローニャ児童図書展」事務局から板橋区への国際絵本の寄贈が始まったらしい。その後、寄贈された絵本を収めた「いたばしポローニャ絵本館」が 2004 年に開館し、絵本展や翻訳大賞といった事業を行っている。昨年 4 月 1 日現在の蔵書数は 10 言語で 29,980 冊！そのうち 1,404 冊がイタリア語とのこと。実はまだ一度も行ったことがないので、表彰式の折にはゆっくり訪れてみたいと思っている。

私は 2002 年にこのコンテストの存在を知った。

早速、課題絵本を取り寄せたのだが、イタリア語で書かれている文章を読み、その意味がわかって、絵本として相応しい日本語に置き換えることがうまく出来なかった。いかにも辞書から引っ張ってきましたというような、不自然でぎこちない訳文にしかならず、応募を諦めた。その後も、課題絵本を取り寄せて読むだけ読み、応募はしないということは何度か繰り返した。



初めて応募したのは確か第 19 回。翻訳した日本語文を自分なりにブラッシュアップして臨んだつ

もりだったが、入賞どころか最終審査にも残らなかった。ああ、やはり難しい、翻訳の壁は高いなあとがっかりし、しばらくコンテストから遠ざかった。

それが再び応募する気になったのは、コロナ禍が原因である。私は全国通訳案内士としてイタリア人観光客を案内するガイド業もしていたのだが、2020年の春以降、その仕事が全て無くなってしまった。たっぷりと空いた時間、そして減少した収入の穴埋めをするために何かアルバイトでもしようかと考えたものの、イタリア語以外に出来ることもやりたいことも思いつかない。そんな時に思い出したのである。そうだ、絵本の翻訳コンテストには賞金があったぞ…というわけで、なんともゲンキな動機で、一昨年、第27回の翻訳大賞に応募。最終審査には残ったが入賞はしなかった。やはり不純な動機ではダメらしい…という冗談はさておいて、応募者全員には、審査結果と審査員による講評が郵送される。複雑な文法構造をしている箇所や、難しい表現の箇所など、詳しく解説をしたものが添付されている。また、他の応募者の工夫された翻訳例もいくつか紹介されており、とても勉強になる。この講評は翻訳大賞ホームページでも公開されているので誰でも見る事が出来る。

さて、2021年度、第28回の課題絵本のタイトルは *Il giardiniere dei sogni* だった。直訳すると「夢の庭師」だが、翻訳がこれでいいわけではない。伊和中辞典によると *giardiniere* は「植木屋、庭師、園芸愛好家」と載っている。また、Treccani 伊伊辞典によれば「Chi coltiva e cura un giardino. (庭を耕して世話をする人)」とある。植木などの植物の世話をする人が *giardiniere* ということだ。しかしタイトルには *dei sogni* と続いているので、「植物」ではなく「夢」の世話をしているらしい。となると、「植木屋」とか「庭師」といった、植物を連想させる日本語ではまずいのではないかと思った。また、「夢」という言葉も、眠っている時に見る夢、いつかイタリアに留学したいといった願いを意味する夢など、いくつかの意味がある。いずれにせよ、夢を植物のように世話をする人の話とはどんなものなのだろうとワクワクしながら絵本を読んだ。

ストーリーはこうである。あるところにとても年老いたおじいさんがいる。そのおじいさんは、タイ

プライターでお話を書くと、そのページをあるところに埋め、植物のように世話をする。それはやがて大きな木になりたくさんの葉をつけるのだが、表紙に描かれている通り、それらの葉は物語のページなのである。その後おじいさんの手によって本にされたお話たちは、鳥が翼を羽ばたかせるように、ページを羽ばたかせ遙か遠くへ旅立っていく。どのように物語が生まれるのかが空想豊かに描かれており、楽しい内容の絵本である。

しかし訳すとすると、非常に難しいものだった。まず前提として、イタリア語の原文を正しく理解することが必須である。絵本なんだから使用されているイタリア語も簡単だろうと思ったら大間違い。接続法、条件法、遠過去など、私たちイタリア語学習者が中級以上で学ぶ文法事項が目白押しなのである。子供の頃から難しいものを読むんだなあと思うところだが、イタリア語圏で育つ子供が母国語としてイタリア語を習得するのと、私たちのように大人になってから外国語として習得しようとするのでは、アプローチの順序や方法が異なると当然である。そういえば、イタリア人の知り合いが、イタリアの子供たちは、絵本や小説などを通して、遠過去とは、どこか遠い場所や、遠い時代のことを語る時に使うものだと言っていた。同じように接続法や条件法も、小さい頃から様々な文脈における例文を記憶に蓄積して、どのような場合に使うのか習得していくのだろう。

イタリア語の原文が理解出来れば、次は日本語に置き換える作業である。絵本にふさわしい言葉遣いにしなければと焦る気持ちを抑えて、まずは原文に忠実に訳すことにした。ここで日本語に置き換えられないと、私の場合であるが、イタリア語の原文を理解出来ていないことを意味する。イタリア語、辞書、日本語の間を行ったり来たりしながら、とにかく全部を日本語にする。この時点では、まだごちなく、日本語としては不自然さの残る翻訳調の文章なので、ここから絵本にふさわしい言葉遣いに整えていくことになる。

でもそれはどんな日本語なのだろうか。それを知るために、近所の図書館へ行った。6畳くらいの広さの空間を囲むように本棚が並び、絵本がぎっしりと収められていた。私は絵本については全く詳しくないので、とりあえず外国の絵本を適当に

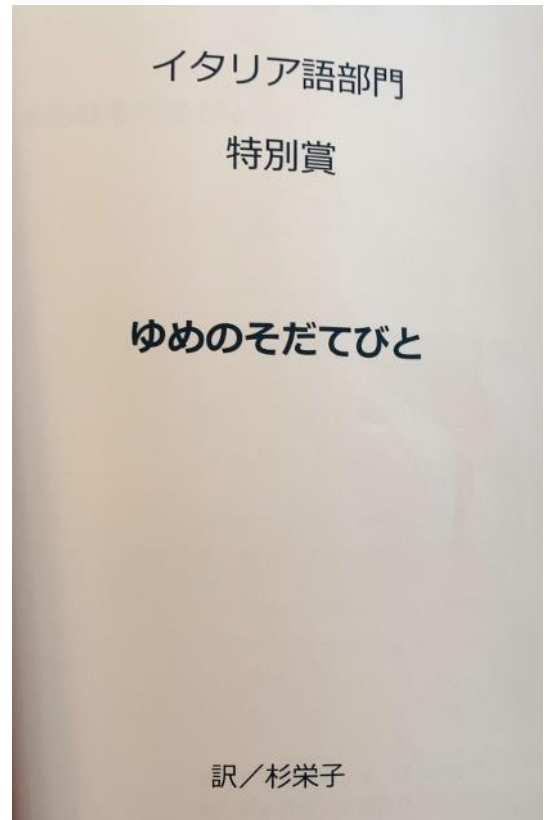
取り出して色々を読んだ。わかりやすい日本語に訳されているものがほとんどだったが、韻を踏んだり、言葉遊びをしている訳文もあった。原文と照らし合わせたわけではないが、おそらく元の絵本もそういった雰囲気なのだろう。しかし、今回の課題絵本は、そこまで凝った日本語にしなければならないようなイタリア語ではないと思ったので、平易な日本語で短い文章にしようと決めた。

新聞記事や小説など、まとまったイタリア語を読んでいると、時折やたらと長い文章に遭遇することがある。文章の終わりを示すプントを探しながら読んでいたら、1ページ丸ごと一つの文章だったということもあった。そんなに長くする必要があるのであるだろうか、途中で切っても問題ないのでは、と私なんかは思ってしまうのだが、何らかの作者の意図があるのかもしれない。今回の課題絵本にも、絵本にしては長いと思う文章がいくつかあった。例えば最初の方でおじいさんの様子を描写する文章がある。“Portava un buffo cappello, un cespuglio bianco come barba e un bel paio di occhiali sul nasone, che ballavano mentre l'omino schiacciava i tasti di una rumorosa macchina da scrivere.” 前半部分は「(おじいさんは)滑稽な帽子、白い茂みのようなひげ、大きな鼻の上に素敵な眼鏡をかけていた」という意味で、その「眼鏡」は、「小柄な男性(=おじいさん)がうるさく音を立てるタイプライターのキーを叩くと踊っていた」と、関係代名詞 *che* を使って後ろから修飾されている。これを絵本に適した平易な日本語で、かつ自然な一文にまとめるのは色々無理があると思った。例えばイタリア語では帽子も髭も眼鏡も一つの動詞 *portare* で描写出来るが、日本語ではそれぞれ「かぶる」「生やす」「かける」と異なる動詞と組み合わせるからだ。どうしたものか考えた結果、文章を3分割し、構文や順序も変えることにして、次のような日本語にしてみた。「おじいさんのぼうしはこっけいなかたち。しろいおひげはくさむらみたい。ガチャンガチャンとタイプライターをたたけば おおきなはなのうえでメガネがおどるようにはずんだ。」元の意味を保ったまま、読みやすい日本語に出来たのではないかと思っている。こんな風に手を加えながら、全文の訳を作っていた。

最後にもうひとつ、絵本は声に出して読む機会が多いという点にも気をつけるようにした。出来上がった訳文を、実際に声に出して何度も読んでみた。読みづらく引っかかるような箇所があれば、もちろんここでも元の意味を変えないように、別の単語に入れ替えてみたり、言い回しや並び方を変えてみたりした。

こうした一連の作業の中で最も難しかったのは、自分の作った文章を客観的に眺めることだ。イタリア語の原文を読んでいない人に、絵本のストーリーと雰囲気をきちんと伝えるには、この言葉で、この表現でいいのだろうかとか問いかけながら作業をした。イタリア語もだが、日本語の語彙力も必要だと痛感したし、良い翻訳とは何だろうかとか色々考えさせられる、大変だけど面白い経験だった。

今回の記事を書くにあたって、絵本も訳文も読み返した。もっとこうすれば良かったと思う箇所が出てきて、全文やり直したい気持ちになった。この経験を生かして次回も頑張ることにしよう。



【最終的にタイトルはこのように訳した】

(当館語学講師)

カラブリアの小さな町を訪ねて

パオラとグアルディア・ピエモンテーゼ

深草 真由子

ブーツの形をしたイタリア半島のちょうど足の甲の部分にあたる、カラブリア州コゼンツァというところにわたしは住んでいる。コゼンツァの街のチェントロはイタリア会館の YouTube チャンネルですでに紹介させていただいた。「歴史的建築物のブラウンと樹々のみどり色が入りまじって、景色がほんとうに美しいところだね」。ビデオを見て、そんな感想を言ってくださった方がいた。

暮らしていると、どうしてもいろいろな問題が見えてくる。「嫌だけど、でもどうしようもないし…」と、あきらめに似た思いを抱えながらここにいる。それだから、自分が毎日のように目にしているものを美しいと言ってくれる人がいることに、わたしは少し慰められた。結局、気づくことができるかどうか、なんだろう。心をときめかせてくれるものなんというのは、手の届くところに実はたくさんあるものなのだ。

わたしは空気がとりわけ澄んでいる日に海の上に浮かんで見える火山島ストロンボリの風景が最近とても気に入っていて、毎週のようにティレニア海のほうへ出かけている。今回はカラブリアの海岸沿いにある興味深いスポットをいくつか紹介したい。

*

まず、パオラという街にあるサン・フランチェスコの寺院から始めよう。フランチェスコとは、小鳥に説教しているところをジョットがフレスコ画に描いた、アッシジの聖人のことではない。十五世紀のパオラに生まれたフランチェスコのことで、アッシジのフランチェスコの思想に感銘をうけ、各地を巡礼したのち隠遁生活に入り、ミニモ会という托鉢修道院をひらいた人である。

とくにイタリア南部で敬われている聖人で、ナポリのプレビシート広場にある白い大きな教会はパオラのフランチェスコに捧げられたものである。カラブリア地方にもフランチェスコやフランチェスカという名前の人がたくさんいるが、たいていの場合、アッシジのフランチェスコではなく(当然ながらASローマのトッティでもなく)、パオラのフランチェスコにちなんだものである。



【パオラのサン・フランチェスコ聖堂】

パオラのサン・フランチェスコ聖堂はティレニア海が見渡せる山の上であり、多くの巡礼者が訪れる。聖堂の裏側には森が広がり、そこにはフランチェスコが長いあいだ隠れ暮らした洞窟や、彼が杖でトントンと地面を叩いたら湧きだしたといわれる泉などが残っている。第二次世界大戦中の空襲で、敷地内に落とされたものの爆発することなく、聖堂を破壊せずにすんだ爆弾も展示されている。

聖堂の中に入っていくのは、フランチェスコとのつながりを必要としている熱心な信者の方ばかりに見えたので、観光客のわたしは入場を遠慮することにした。フレスコ画の美しいキオストロ(回廊つき中庭)が内部にあると聞き、ぜひ見てみたかったのだが、またの機会にしよう。そして奥にあるフランチェスコの洞窟のほうへ向かうことにしたのだが、その道中でなによりもわたしの関心をひいたのはこんな注意書きだった。

〈衛生上の理由から、壁にチューインガムを貼りつけたり、唾を吐いたりすることは禁止されています〉



【「悪魔の橋」で見つけた注意書き】

「こんなことのために、こんなにりっぱなプレートがわざわざ作られるとはね」と、半ば呆れていたわたしに後日、地元の友人が教えてくれた。どうやらここ、パオラのフランチェスコの聖地には悪魔が悪さをしにやって来たことがあるのだという。

この地方で代々語り継がれていることによると、フランチェスコは聖堂の裏を流れる小川に橋をかけるため悪魔に協力を求め、悪魔はできた橋を最初にわたる者の命と引きかえに、それに応じたのだそう。

ところが、できた橋を最初に通ったのは人間ではなくて犬。フランチェスコが住人たちの命を守るため、犬を先にわたらせたのだ。カンカンに怒った悪魔は橋をつぶしてしまおうとした。橋はなんとか破壊をまぬがれたものの、そのとき悪魔が残していった手の跡(らしきもの)が今もあり、それを目掛けて信者たちが唾を吐きかけているのだ。

不潔？マナー違反？まったくそのとおり。ただ、そんな迷惑行為がくりかえされる背景にはこのような言い伝えと、「悪魔をフランチェスコの聖域に二度と近寄らせない」という信者たちのつよい決意があったのだ。

しかし唾だけならともかく、チューインガムは困ったものだ。

*

パオラから車で十分ほど北上すると、高台の上にグアルディア・ピエモンテーゼという小さな村が見える。グアルディアはイタリア語で「見張り」という意味で、海を監視する塔がこのあたりにあったことに由来するといわれている。ピエモンテーゼはそのまま「ピエモンテの」という意味で、トリノな

どがあるアルプスの麓一帯のことを指すのだが、千キロも離れた南イタリアのカラブリアといったいなんの関係があるのだろう。

実はグアルディア・ピエモンテーゼはピエモンテから移ってきたワルドー派の人々によって築かれた村なのである。

ワルドー派というのは、十二世紀にリヨンの商人ワルドーが創設したキリスト教の教派のひとつである。清貧を説くワルドーの思想は多くの人々の支持をあつめていたが、ローマ教皇からは異端の宣告を受けてしまった。ワルドー派の人々は迫害を逃れるためにリヨンからピエモンテに移ったが、そこでもなお身の危険を感じていた一部の者たちは、さらにもっと遠い地をめざしてカラブリアにたどり着いた。そしてここで平穏な暮らしを営みながら、しずかに自分たちの信仰を守ったのである。

ところが十六世紀になって宗教改革がおこると、ワルドー派はふたたび弾圧の対象となる。1561年、グアルディア・ピエモンテーゼの信者の多くは虐殺された。かき切られた喉元から流れ出た彼らの血が道を赤く染め、村の入り口の門まで到達するほどだったそうで、その門は現在でも「血の門」と呼ばれている。生きのこった者たちは棄教を強いられたが、実はひそかに信仰を守り抜いており、自分たちのアイデンティティを子孫に伝えた。



【グアルディア・ピエモンテーゼの「血の門」

(Porta dal sang はオック語)】

グアルディア・ピエモンテーゼでは、中世のワルドー派の人々が話していたオック語(フランス南部で話される言語)が、細々とではあるが今でも使

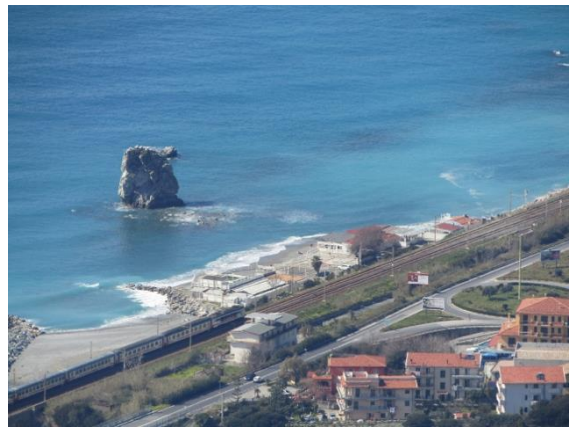
われつづけている。

かなり古い文献であるが、ゲルハルト・ロルフスというドイツの言語学者が方言の研究のためにカラブリアを実地調査して、1933年に発表した *Calabria, la Babele delle lingue antiche* という短いエッセイがある。カラブリアには村の数と同じくらいたくさんの方言があり、なかにはアルバニア語やギリシャ語に起源があるものもあるのだが、グアルディア・ピエモンテーゼで使われているオック語は、他のカラブリア方言とまったくつながりのない、ユニークな存在である。

ロルフスの報告するところによれば、グアルディア・ピエモンテーゼの住人たちは月曜日のことを luns、火曜日のことを mars というらしい。オック語はロマンス語のひとつだから、おなじロマンス語の仲間であるイタリア語を知っていれば、単語の意味は類推できることが多い。太陽は *sulegl* というそうだが、これはイタリア語のソーレとフランス語のソレイユの中間といったところだろう。しゅうとめは *madòna* である。イタリア語のマドンナ、フランス語のマダムに相当する言葉だと思う。そうであれば、もともとは「わたしの婦人」という意味で、男性が自分の愛する女性にたいして使ったものだ。それがグアルディア・ピエモンテーゼではなぜか「しゅうとめ」を意味するようになった。しゅうとめも確かに、大切な女の人であることに変わりはないが、いったいどういうわけだろう。

*

グアルディア・ピエモンテーゼから坂をくだり海辺へ向かう。シーズンオフの海岸通りには、地元でとれた野菜や果物を売る露店がならんでいる。砂浜では地元の人たちが日向ぼっこをしたり犬を散歩させたり、思い思いに時間を過ごしている。やっぱり海は観光客が多くて騒々しい真夏より、のんびりできる春がいい。水辺にすわって、波の音を聞きながらパニーノを食べ、遠くのストロンボリを眺めながらウトウトするのが、今のわたしの最高のぜいたくなのである。



【グアルディア・ピエモンテーゼの展望台から】

<参考文献>

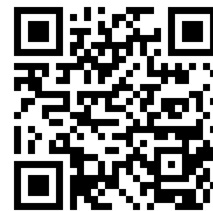
G. Rohlfs, *Calabria, la Babele delle lingue antiche*, in *Memoria della Calabria, pagine di viaggiatori europei dell'Ottocento*, a cura dell'Associazione Culturale Simposio Mediterraneo.

(元当館スタッフ)

<オンラインレッスン随時受付中>

zoom を使用したマンツーマン(1対1)のオンラインレッスンです。こんな方におすすめです！

- ・関西圏以外や外国にお住まいで、イタリア会館で対面のレッスンが受けられない方
 - ・外出を控えられている方
- 受講料や規約はプライベートレッスンに準じます。



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>